

氏 名	西 欣 也
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 139 号
学位授与の日付	平 成 11 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 美 学 美 術 史 学 専 攻
学位論文題目	認識論的観点に基づくアドルノ思想の総合的探求

論文調査委員 (主 査) 教 授 岩 城 見 一 教 授 加 藤 尚 武 助 教 授 中 村 俊 春

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20 世紀ドイツ哲学、及び美学にとり重要な位置を占める、テオドール・W・アドルノ（1903-68）の思想全体を、人間の認識が絶えず陥る誤謬、そしてその孕む暴力性の構造を批判的に把握する「認識論」としてあとづける試みである。論者は、アドルノの用いる「キーワード」（「ミメシス」、「ユートピア」、「非同一性」、「自然支配」等々）に基づいてアドルノの思想を論じる従来の議論から距離を取る。このような議論も、アドルノ研究に一定の視点を提供してはきた。しかしそれは、一つ概念が連想させる意味に拘束され、アドルノとは明らかに異なる思想をアドルノから読み取るという問題をいつも孕む。これらの解釈の多くは、アドルノがネオ・マルクス主義的思想家の一人であるとともに、戦時中アメリカに逃れたユダヤ系思想家であることを前提にして、アドルノの基本概念をこの前提から理解する。しかし、一つ概念から出てくる連想は、常に解釈者の連想であり、連想に頼る解釈は、いかにテキストに言及しようとも、すべてを解釈者の視点に取り込み、結局、自分の既知の視点をテキストの内に再認することで終わる。難解な文体からなるアドルノの思想（特に「美学理論」）に関しては、このような解釈が流通している。これに対して論者は、テキストに即した解釈を心掛け、その結果取り出されるのが、アドルノの「認識論」の特性と、その前期から後期への変化である。この研究は、アドルノの思想の構造を、彼の参照した、カント、フロイト、ヘーゲルの思想と比較しつつ包括的に明らかにしようとし、また、アドルノの基本思想が、文芸作品の解釈においてどのような具体的な姿を取るかを、重要な文芸解釈と照らし合わせつつ論じる。これを通して本論文は、従来のアドルノ研究に一石を投じ、またこれからのアドルノ研究に一つの大切な視点を提供するという目的の下に書かれている。

本論は、「序」と「最終考察」、それらに挟まれた5章からなる。

第一章（「超越論的」心理学の構想—最初期論考（1927）に見る、カントおよびフロイトとの関係—）で論者は、従来余り注目されなかった最初期のアドルノの教授資格申請論文である「超越論的心理学における無意識の概念」を取り上げる。この時期アドルノは、師、H・コルネリウスの認識論から基本的祖点を学び、この視点からカントの『純粋理性批判』と、フロイトの「無意識」に関する理論とを批判的に受容する。基本的視点とは、現在の「意識」は、過去の全経験と、未来への予測との、（多くの部分は隠された）「連関」の内に成り立ち、絶えず新たに構成されてゆく、ダイナミックな運動として理解されるべきだ、という視点である。この祖点を哲学的に捉え直すことで、アドルノは、カントの『純粋理性批判』における「物自体」の概念と、フロイトの「無意識」概念とを、超越論的視点から批判的に受容する。カントは、「仮想的」なものである「物自体」を「限界概念」と呼び、「仮想的なもの」と「経験的なもの」との混同を戒めた。論者によれば、意識の「連関」を重視するアドルノは、「物自体」の概念を一層動的に捉え、カントとともに「物自体」を「連関」の外部に「実体」化し、そこに経験を還元する思想を批判するとともに、また意識は連関であるがゆえに、この連関の外部は、決して経験できないとしても、「ネガティブ」なものというかたちで、意識の展開に常に関係してくることを捉えた。この視点から当時の「無意識」概念も捉えられる。経験外の無意識は決して実体化できず、そこから人間の経験を説明することは矛盾であるが、しかし常に「無意識」は「ネガティブ」なかたちで意識に関わり続ける。論者は、アドルノのこのような思考は、この思想

家の「透徹した言語観」から理解すべきだと主張する。すなわち言語は、一方で常に感覚的に経験される、本来的に物質的なものであるが、他方でそれは、経験を越えたものを指示しうるので、人間を超越的世界へと誘う。この両義性のゆえに言語を用いる人間は、経験を越えたものを経験と混同する矛盾（限界の「抹消」）に絶えず囚われる。論者は、アドルノが言語的存在としての人間が陥るこの矛盾に眼を向け、人間的認識の構造を批判的に検討する思考をすでに初期に準備していたことを明らかにしている。

第二章（「社会・言語・文化諸領域における連関システムの批判—ゲオルゲ派文学作品解釈（1938）に見る、ベンヤミンとの関係—」）及び第三章（「言語の媒介構造をめぐる反省の深化—ヘルダーリン解釈（1963）に見る、ハイデガーとの関係—」）では、上に見た基本的立場が、アドルノの文芸作品の解釈においてどのように具体的に展開されたかが検討される。第二章において論者は、アドルノの「ゲオルゲとホフマンスタール」（1940）の脚注に出てくる「石女」と「翻訳」（後者については「外来語の使用について」（1934?）も参照される）に注目し、この時期アドルノが、W・ベンヤミンの文芸解釈に影響されつつ、自らの認識論を社会理論にまで展開していたことをあとづける。ボードレールが好んで取り上げる「娼婦」や「不妊」は、ベンヤミンの文芸解釈においてダイナミックな弁証法的社会理論として展開されるが、この影響化、アドルノもゲオルゲ派を批判することを通して、自己の認識論を社会理論に適用する。論者によれば、ベンヤミンによるボードレールの「娼婦」の解釈と同様に、アドルノも「石女」というボードレールの文芸モチーフを、単に社会的連関（「生殖」のイデオロギ—）から疎外された「外」とみなし、そこに否定すべき社会に対抗する「ポジティブ」な「表象」を見ることはしない。このような、社会の内と外との「限界」を設定した上での「外部」への意識は、それが批判のかたちを取るにせよ、同情というかたちを取るにせよ、すでに内に「隷属」し、しかもこの隷属の「自覚を抹消」することになることを、アドルノは認識論を通して知っていたからである。外来語の翻訳、導入もまた、決して外部がポジティブに内部に対立するのではなく、むしろそれが導入されることで「円滑に機能する言語表象のシステムを内側から中断させ」ること、このことをアドルノは「認識論的原理に基づく分析」を通して把握していた。これが論者の理解であり、それはまた、今日のフェミニズムや、ポストコロニアリズムをめぐる議論を考慮に入れつつ、アドルノの思想の射程を測る試みでもある。

第三章では、アドルノ、ポール・ド・マン、そしてハイデガーの三者によるヘルダーリン解釈が検討され、ハイデガーがヘルダーリン解釈で行う、詩における「本質的言語」と日常的な「非本質的言語」との区別は、本質—非本質の二分法を固定（「実体化」）するものとみなされる。論者によれば、ヘルダーリンの詩は本質を直接語るのではない。ヘルダーリンの詩は、言葉を媒介にせざるをえない詩人には、直接的な本質把握は、常に阻まれているという、言葉と、その表現内容との間に常に介在する「限界」に定位している。アドルノは、ポール・ド・マンと同様に、この点に注目しており、それゆえ論者は、彼らのハイデガー批判は、認識論的に正当だとみなす。また、ヘルダーリンの詩における「パラタクシス（並列技法）」と「コレスボンデンツ（符合）」とに注目するアドルノの解釈は、言語に基づく認識の限界を見定めるものとして、ヘルダーリンの詩の優れた解釈であると同時に、アドルノの認識論の進展をも示すものとみなされる。一方の方法は、語るべき事柄（本質）を、言葉を並べることで仄めかし、他方は、掛け離れた事柄を思いがけなく結合する。これらの技法を用いることでヘルダーリンが示しているのは、言語は、その物質性のゆえに、普通信じられているようには、本質を透明に伝達できないという、言語の本性であり、また認識の限界である。

論者のこの理解は、今日の美学の最も基本的で、しかししばしば忘れられる課題、言語やイメージそれ自体の持つ感性的物質的側面に絶えず反省を加えるという課題、この課題に、アドルノの認識論的芸術解釈に即して答えようとする試みでもある。

第四章（「論理の運動体によるテキスト上の実践—『美学理論』（遺稿）でのフォルム概念に見る、ヘーゲルとの関係—」）において、論者は再びアドルノの認識論自体に戻り、ヘーゲル哲学との対決によるアドルノの理論の進展をあとづける。内容と形式との分離を批判し、相互の弁証法的関係を解くヘーゲルから、アドルノは決定的視点を学んだ。それは、内容を形式から分離し実体化する形而上学を超越する視点である。論者は、ラカン派のS・ジジェクによるヘーゲル解釈を参照し、ヘーゲルとアドルノとの差異にも言及する。それは、ヘーゲルが出来上がった形式（形式化された内容）から形式の由来を反省するのに対し、アドルノは形式化された内容を更新してゆく形式を重視する点にある、とみなされる。論者はこの差異を＜事後的なフォルム＞と＜先取りされたフォルム＞と呼び、後者の立場によってこそ、経験の概念的反復（予め捉えたフォルムで経験を語るという意味での「トートロジー」）の「暴力」を逃れる、「存在者変容の法則」としてのフォルムの意

義が明らかになる、と主張する。これは、芸術を解釈する上での重要な視点を、アドルノの認識論に即して提示したものと
いえる。またこのような開かれた思考を実践するために、アドルノが従来の哲学的論証とは異なる文体を選んだことが指摘
される。この指摘は、アドルノの特異な文体の意味を理解する上での一つの提案である。本論の結び（「最終考察」）におい
てこの問題は改めて取り上げられ、ヘーゲルの『美学』を参照しつつ、前期から後期へのアドルノの思想の展開が、「記号」
から「象徴」への変化として捉えられる。それは、人間の経験の構造を認識論的に（言語という「記号」によって）厳密に
論じる哲学的方法から、認識のよって立つ、経験と経験を越えたものとの境界を実践的に語り続ける方法への変化を意味す
る。

また、第五章（「解釈の優位か不可能性か？—理論的移行期におけるカフカ解釈（1942-53）—」）では、再び中期アドルノ
の芸術解釈に戻り、それをベンヤミンの解釈と比較することで、アドルノの前期から後期への思考の変化があとづけられる。
このとき論者は、両者の往復書簡とカフカの「掟の門」とに注目し、両者の解釈の共通点と差異とを明らかにする。カフカ
のこの作品への注目、ベンヤミンの批評の特色を知る上でも、また彼とアドルノとの差異を、デリダとジジェクとの差異
と対応させつつ明らかにする上でも、すなわち現代哲学の議論の場に関係づけて論じる上でも、有効とみなされている。こ
れら多様な文献の検討を通して明らかにされるのは、「掟の門」の前で入ることを門番に拒まれ、内部を探究することなく息
を引き取る男の寓話の解釈の差異である。アドルノとベンヤミンは、相互の影響関係の中で、この寓話を「逆さまの神学」
とみなした。彼らはともに、そこに既に与えられた神学的意味を読み取るのではなく、「予期」と「延期」とに眼を止めるこ
とで、真理の「未確定性」を読む。しかし、アドルノは、この未確定性の文学を社会との関係から「弁証法的」に解釈する
ことを書簡でベンヤミンに求める。論者はここに、未確定性にとどまり、それを具体的に論じるベンヤミンに対する、それ
を社会と結びつけようとするアドルノの「解釈への意志」と、余り作品の細部を問題にしない「抽象的思弁」性を見る。

この差異はまた、カフカの作品から「掟への接近不可能性」を読み、「テキストの読解不可能性」の立場を強調するデリダ
と、それに対して、ヘーゲルの反省理論に基づいて、掟は「接近不可能」とされる時点ですでに接近可能となっており、そ
のようなものとして解釈可能とみなすジジェクとの差異に対応せしめられる。論者はこのように、ベンヤミンとアドルノと
の共通性と差異とを、現代哲学の議論における共通性と差異と重なり合うような、アクチュアルな問題として描き出そうと
試みている。

以上のようにこの論文は、極めて難解なアドルノのテキストの綿密な解読と彼に影響を与えた重要な哲学思想の理解を通
して、アドルノの認識論の特性を解明し、またこの思想が芸術の具体的な解釈においてどのように働くかを明らかにし、さ
らにアドルノの思想の現代性を現代哲学を考慮に入れて吟味することを試みている。これら多様な視点からアドルノの思想
の根本構造とその変化とを捉え、今後のアドルノ研究に寄与すること、これがこの論文において目指されたものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀ドイツの哲学的美学に重要な位置を占める、Th・W・アドルノの思想を、特有の「認識論」の展開とし
てあとづける試みである。

第一章で論者は、従来余り注目されなかった最初期の論考（「超越論的心理学における無意識の概念」）を取り上げ、アド
ルノの認識論の形成をたどる。師、H・コルネリウスの視点、つまり、「意識」を、過去の想起と未来への予測との「連関」
の内に成り立ち、絶えず新たに構成されてゆく、ダイナミックな運動とみなす視点から、アドルノはカントの「物自体」の
概念を批判的に受容する。アドルノはカントとともに「物自体」を「連関」の外部に「実体」化する思想を拒否するが、「物
自体」という意識の外部（「限界概念」）は、経験を越えた「ネガティブ」なものとしては、意識に常に関係してくる点を強
調する。この視点からすれば、フロイトの「無意識」概念も、意識外の実体としてでなく、常に「ネガティブ」なものとし
て意識に関わり続ける外部となる。このような思考は、「透徹した言語観」に基づく。すなわち言語は、一方で本来感覚的物
質的なものであるが、他方でそれは経験を越えたものを指示しうる。この両義性のゆえに人間は、経験を越えたものを経験
と混同する矛盾（限界の「抹消」）に絶えず陥る。論者は、アドルノが言語的存在としての人間が陥るこの矛盾に眼を向け、
認識の構造を批判的に検討する思考をすでに初期に準備していたことを明らかにした。この章は、アドルノの基本的思想を
捉えたものとして意義深い成果となっている。

第二、三章では、上の基本思想の、文芸論への適用が検討される。第二章では、「ゲオルゲとホフマンスタール」論（1940）

脚注の「石女」と「翻訳」（後者については「外来語の使用について」（1934?）も参照される）が取り上げられ、この時期アドルノが、W・ベンヤミンとの交流の中で、認識論を社会理論に展開したことが示される。ベンヤミンによるボードレールの「娼婦」の解釈と同様に、アドルノも「石女」というボードレールのモチーフを、単に社会的連関（「生殖」のイデオロギ）から疎外された「外」としての、「ポジティブ」な「表象」とはとらずくむしろ社会システム内部の矛盾（限界）を揺するネガティブな外部として理解する。外来語の翻訳も、「円滑に機能する言語表象のシステムを内側から中断させる作用をもつ。この「認識論的原理に基づく分析」をアドルノは一貫して行っている。論者のこの理解は、今日のフェミニズムや、ポスト・コロニアル時代における翻訳の問題を考慮に入れたアドルノ解釈になっている。

第三章では、アドルノ、ポール・ド・マン、そしてハイデガーの三者によるヘルダーリン解釈が検討され、ハイデガーによる、詩的な「本質的言語」と、日常的な「非本質的言語」との区別に対するアドルノの批判は、本質—非本質の区別を「実体化」する思想への批判として、アドルノの基本思想と深く関わるものであることが明らかにされる。論者によれば、この点でアドルノは、ポール・ド・マンと共通の立場に立つ。また、ヘルダーリンの詩における「パラタクシス（並列技法）」と「コレスポンデツ（符合）」とに注目するアドルノの解釈は、言語的認識の限界に常に関わる、ヘルダーリンの詩の具体的な解釈であると同時に、アドルノの認識論の進展をも示すものとみなされる。一方の方法は、語るべき事柄（本質）を、言葉と並べることによって仄めかし、他方は、掛け離れた事柄を思いがけなく結合する。これらの技法が示すのは、言語は、その物質性のゆえに、本質を直接的には伝達できないという、言語の本性、認識の限界である。論者のこの理解は、今日の美学の前提である、言語やイメージそれ自体の持つ感性的物質的側面をはっきり自覚したものとして、評価されるべきである。

第四章において論者は、ヘーゲル哲学との対決によるアドルノの理論の進展をあとづける。内容と形式との弁証法的関係を説くヘーゲルから、アドルノは、内容を形式から分離し実体化する形而上学を超える視点を学んだ。論者は、ラカン派のS・ジジエックによるヘーゲル解釈を参照し、ヘーゲルとアドルノとの差異を、前者が把握された形式から内容を見るのに対し、後者が、内容を更新してゆく形式の働きを重視する点に見る。論者はこの差異を＜事後的なフォルム＞と＜先取りされたフォルム＞と呼び、後者の立場によって、経験の概念的把握（与えられたフォルムで経験を語る「トートロジー」）の「暴力」を逃れる、「存在者変容の法則」としてのフォルムの意義が明らかになる、と主張する。またこのような思考を実践するために、後期アドルノが従来の哲学的論証とは異なる文体を選んだという指摘も、アドルノの特異な文体の意味を理解する上で、重要な指摘である。本論の結びにおいてこの問題は改めて取り上げられ、ヘーゲルの『美学』を参照しつつ、前期から後期へのアドルノの思想の展開が、「記号」から「象徴」への変化として捉えられる。それは、人間の経験を認識論的に（言語という「記号」によって）論じる方法から、経験と経験を越えたものとの境界を実践的に語る方法への変化を意味する。

第五章では、ベンヤミンの文芸解釈との比較により、アドルノの前期思想から後期思想への変化があとづけられる。このとき論者は、両者の往復書簡とカフカの寓話「錠の門」に注目する。「錠の門」に入ることを門番に拒まれ、門前で待たされたまま息を引き取る男の寓話を、アドルノとベンヤミンは、相互の影響関係の中で、「逆さまの神学」とみなした。彼らはそこに既存の神学的意味を読み取るのではなく、真理の「未確定性」を読む。しかし、アドルノは、この未確定性の文学を社会との関係から「弁証法的」に解釈することを書簡でベンヤミンに求める。論者はここに、未確定性にとどまり、それを具体的に論じるベンヤミンに対する、それを社会へと結びつけるアドルノの「解釈への意志」と、「抽象的思弁」性を見る。この差異はまた、カフカの作品に「錠への接近不可能性」を読み、「テキストの読解不可能性」の立場を強調するデリダと、それに対して、ヘーゲルの反省理論に基づき、錠を「接近不可能」なものとしては解釈可能とみなすジジエックとの差異に対応せしめられる。

確かに、アドルノの主著で、この論文で触れられなかったものもあるし、参照された思想の理解について、様々な異論もありうる。文章の難解な箇所や、翻訳になお一考を要する箇所もある。しかし、難解なテキストの綿密な解読と重要な哲学思想の検討を通してアドルノの思考の核心に迫り、またこの思想の文芸解釈への適用を具体的に論じ、さらにアドルノの思想を現代哲学を考慮に入れて吟味した本論文は、今日望まれる本格的なアドルノ研究になっているとみなしてよい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、1999年5月10日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。